

## 夜を恐れず、朝へ行く

田中颯英

十月十日（金曜日）

昨日、同じクラスメイトの小沢さんが事故で亡くなった。

朝のホームルームはクラス担任の落胆した訃報の一言で始まった。いつもならクラスメイト達は先生が喋っていてもお構いなしに自分の事を優先してしまう、宿題をやったり話していたり本を読んだり早弁したりとホームルーム時間は正に自由時間と言っても過言では無かった。でも、今日は違う。

クラスの皆を率先して引っ張ってくれていた小沢さんが亡くなったのだ、クラスの動揺は隠せないし、担任の言葉を理解した途端に泣き出してしまふ子だっていた。僕の隣の山田はいつも早弁をするくせに今日は弁当箱の蓋を閉じて俯き加減で話を聞いていた。

もちろん僕は皆とは違って担任の話はちゃんと聞いているし、言う事だつて守っている。たまに本を読んでしまう時はあるけれど、それでも大部分の話を理解して読書に励むだけであつて決してライトノベルの続きが気になると言うモノでは無い。

でも、今日は違って初めて先生が話している内容に何故か嫌悪した。聞いているだけで雑音が走つて不快だし、何より心から拒絶反応を起こしている。今すぐにも先生の口を閉ざさせて縫い付けたいほどに不快で視界が真っ暗になるようにと願つて、僕は初めて先生の話に抵抗した。目を閉じるだけでも楽になるかと思つて顔を隠すようにして目を閉じて眠るフリをして見たがかえつて耳が研ぎ澄まされてしまい雑音が酷くなつていた。

クラス担任は言う。

今日、通夜があるから出れる人は出て欲しい、と言われた。

クラスの皆は話を聞きながら静かにうなづく人もいれば、時間や場所を聞く人もいた。すぐに帰つて顔を見たいと言う人もいた。小沢さんは愛されているなと思つた。

気遣いが出来て、面倒見のいい人で困っている人がいれば放つておけない性分らしくそれを裏付けるように一回だけその現場を見たことがある。川に何かが落ちてしまったのだろう同級生の女子三人組が川の中に入って必死に何かを探していた。夏はとても気持ちの良い水温で川の水も中々綺麗だから良く入っている人は見る、しかし冬の時期には凍傷とも言える程の霜焼けが出来る程の水温だ、かなりの時間浸かっているのか痛い、痛いと呼びながら必死に探していた。

それを見ていた僕は立ち去ろうとすると小走りで川へと続く階段へ降りて靴とソックスを脱いで川の中へ入り、事情を聞いて一緒に探し出したのだ。放つておけばよいのと思いつながら僕はその場から去つたが今の時代にああいう人間はいないと同時に思った。人が困っている所を見て助けようとするなんて馬鹿の考えることだ、だから僕は彼女の事をバカ女と心の中で呼んでいた。

翌日、女子三人組は無事に探し物が見つかったのか一緒に登校しながら昨日の事を楽しそうに話していた。小沢さんがいてくれて助かったのお礼を言わなきゃね、だの彼女を持ち上げるような事ばかり、それを聞いた人たちが広めて一躍学校内の地位は王様と言えるべきにまでなっていた。

しかしその報いを受けたのか風邪で休んでしまっていた。

そんなエピソードを思い出しながら僕は体調が悪いと担任に伝えて、教室から出て行った。行き先は当然保健室、と言いたい所だけど今はそんな気も起きず僕は渡り廊下の所を渡って真つすぐ保健室へは行かずに図書室の方へと向かった。あそこは管理している先生が少し不用心だから図書室へはいつでも入れれる。

中に入ると誰もいない。

カーテンは閉じられておりそこから陽の光が差して微かに明るい。

陽の光を浴びながらの読書は最高だが管理している先生が来たら色々面倒なので出て行こうと思った。そしてここへ来たのは前に小沢さんが勧めてきた本を見に来た。

ライトノベルが好きな僕は彼女が読む本の趣味は合わない。僕が本を読んでも邪魔をするように内容説明を強いられたり、貸してくれと言われたりとあまりいい思い出が無い。代わりに貸された本も正直に言う内容与内容が小難しすぎて分からなかった。

小沢さんが亡くなる数週間前に図書室へ行くと彼女は本を読んでいた。

いつものように借りていたライトノベルを返して、新しい本を探していると困っている人を見捨てられない面倒見のいい小沢さんが隣に立って、『たまにはコレも読んでみたら？』と勧められた本がそれだった。他にもいくつも勧められたが中でも強調していたのが見に来た本だった。内容は頭の良い小学生の女の子がいくつもの人と出会って、いじめや学校問題を解決すると言う本だった。刊行されたのも最近でニュースや本屋のランキングにもよく乗っている有名な小説だ。

本の裏をめくって貸出表を見る。

今、この瞬間小沢さんがいるなら言うってやりたい。

この本、ボクは読んだことがあると……

貸出表の一番上に僕の名前が書かれている事を知っていたのか知らないけど知っていたのなら彼女はやはり馬鹿だ。

でも、天国へ旅立ってしまった彼女が勧めていた本をもう一度読んでみようと名前を書いて勝手に持ちだして図書室を出て行った。

保健室へ行って仮病を装い早退すると担任に伝えて学校から家へと向かった。

海の近くの学校だからたまに潮の匂いがする。学校から家へはとても近く歩いて数分、走って何十秒と言ったほどの距離だ。正に目と鼻の先である。

ライトノベルしか読まない僕が何故こんな本を読んだかと言えば特に理由が無い。ただ読みやすいとか面白いとか話題に乗ろうとかそう言った理由では無かった気がする。

家に着くと誰も居なかった。

「ただいま」

その言葉を言っても誰も反応を示さない。

今日も彼らは家にはいなかった。図書室のような静けさを放つ家はそことはまた違った静けさがあり、嫌になって自分の部屋へと行ってベッドに飛び込んだ。

時刻はまだ午前九時半、こんな早い時間に眠るのはどうだろうと思うけど何だか疲れてしまった。今は眠りたい、その事しか頭に浮かばず思考停止状態にして僕は眠る事にした。

眠っていると夢は無く、只々黒の世界が広がるだけで何も無かった。

黒い世界で僕はただ一人、その世界に身を預けるように脱力して揺られて、揺蕩う。

何も考えずに寝て、身体が熱くなつて起きると辺りは既に真っ暗だった。熱を帯びた身体を冷ますように買い置きジュースを開けて、飲みながらスマートフォンを見ると時刻は夜の七時だった。

今頃、小沢さんの葬式が始まっているだろう。

制服姿だから今から行っても挨拶ぐらいは出来る。でも、元々彼女のことを煙たがっていたから挨拶をしに行っても感情が浮かばないまま思っても無い事を並べてしまうから行くのは止めて、借りてきた本をもう一度読む事にした。

母親からメールが来た。

内容は今日も遅くなるから玄関に置いてあるお金を使って夕食を適当に済まして先に寝ていて下さいだった。親からの連絡と言ったらこういうのばかりだ。

寂しい訳じゃ無い。

僕が小さい時から彼らは興味が無いのか人に預けては仕事ばかりしている。帰って来ていてもほとんど話さないし、何処かに行こうと言う提案もしなかった。誕生日とか祝い事は欲しくも無いプレゼントを渡されて、メールでおめでとうと言われるだけ。

だから親に愛情と言われるものは注がれたのか甚だ疑問だ。

家を出て、自転車でコンビニへ向かう。

今日は何を買おうか結局豚の生姜焼き弁当になるんだろうなと思いつながら自転車こいでいく。暗く人通りの少ない道を進んで行き、海岸線の方に出るとやっと人通りのある道に出て、そこを左に曲がりコンビニに設置された駐輪場に停めて店の中に入った。

漫画雑誌などが並べられており今日は最新号が出ている事をここへきて知った。

でも、お金はあまり使いたくない為に今週は断念した。いざとなったら山田が貸してくれるだろうと祈って、弁当コーナーへ行く。今日は何を食べようか悩んだ末に結局豚の生姜焼き弁当になった。悩んだには悩んだ、パスタにしようかうどんにしようかと思っていたが変に挑戦をしても失敗した時の事を考えたら勿体ないために安定の食べなれた味に逃げてしまうのだ。会計を済ませて、店員がいつも言うフレーズ、『温めますか?』と言われて食い気味に僕は『いいです』とだけ言う。

いつもここに来て同じ弁当を買っていると言うのに何故いつも、いつも同じフレーズを聞かれなくてはいけない?

店員も店員で同じやり取りにウンザリしながら袋に箸を入れようとしており僕は再び『いいです』とだけ言って店員これまたうんざりしながら箸を戻した。間の抜けた声を聞きながらつり銭を受け取り、睨まれながら出て行くことになった。何も睨むくらいの怒りが生まれるのなら毎回同じ事を言わなくていいのに、と思った。

少々気まずい雰囲気味わったがそんな事は気にしない。時刻は夜の八時を過ぎて、急いで帰って録りためアニメを見乍ら、買ってきた弁当を食って寝ようと思っていた。

そう考えながら自転車で道を進んでいるとある異変に気づく。

さつきから同じ道をずっとループしている気がする。

同じシーンを切り取ってそれを延々に繰り返しているような感覚だ。道が変わらず街灯の位置も並ぶ家々の位置も固定されてそれがずっと並んでいるようだ。ずっと同じ道を進み、『コレは何の冗談だ?』と思いついた頃、僕は諦めて変化を付けてみようかと自転車から降りて歩いてみる事にした。

こう言う状況なら普通は焦るとかそう言った感情が似合うのだろうけど僕は何故かウキウキしている。抜け出せなかったらと言う不安はあるものの滅多に味わえない状況だからこそウキウキしている。このループの真実は何なのか、抜けた先に何かがあるのかとかそう言った事ばかり考えてしまう。

弁当の入った袋を持って歩いてみる。

街灯が少ない道を歩いて、ある一定の道を歩くとゴールと呼べる道は現れずにまた同じ道となる。それを繰り返して五度目の同じ道を歩いていると少し気になる事があった。

同じ道ばかりに気を取られていて気づかなかったが道の途中にあるさら地となっている所に一つのドアがあった。例えるなら青色の猫型ロボットが出すような何処へでも行けるようなドアがさら地にある。古い木目調の何処にでもあるようなドアが一つ不思議なオーラを放ちながら立っており何の固定器具もさされておらず、ただそこに立っている。

ループする道に気を取られていて全く気が付かなかった。

繰り返される事象もこれが原因なのかと思ひ、ドアの前まで近づきドアノブに手を掛ける。これで何も無かつたらいいよ焦りが出てくるぞ。録り溜めたアニメも見れずにどうなるか分からない意味不明な道を抜け出せずに死ぬなんて死んでも嫌だ。

ドアノブを捻ってゆっくりと開けるとそこはさら地などでは無く、古い時計たちが並ぶ店に変わっていた。

そして僕はそこに誘われるかのようにドアの段差を越えてゆっくりと店の中へ入った。店の中は時計ばかりだ。

リズムよく針は動いており、聞いている限りではどれも狂っておらず一つ一つが合わせているように動いていた。大きい時計から家によくある時計まで品物なのかただの飾り物なのか世界のいろいろな時計があつて飽きない。

ここはライトノベルでよくあるような世界だ。

ドアに繋がった世界は異世界だったり常識では考えられないような所だったりする。ここは至って普通ではある、時計で埋め尽くされた所という点では常識では考えられないかも知れないが不思議とここは落ち着いていた。

メトロノームが刻むような時計の針の音が心地よくてこういう所で一度読書をして見たいものだ。

時計ばかりの店を一通り確認し終えると店の奥の方へ進み、カウンター席が備え付けられた所へ来るとカウンターの前に立っている女の人がいた。

僕の気配の気づいたのか女性は不意に振り返ってニコリと笑った。

「いらっしやいませ。どうぞこちらへ」

カウンター席の方に誘われ僕はそれに従い席に座った。

マズいと思った。

こんな古い店だ。時計屋と見せかけて飲食店だったとは……こんな所は大抵高いに決まっている。何より女性の店員の気品が物語っている。

普通の安い店の店員はあまりいい態度を取らずこつちからしたらたまったものではないが逆にこう言う高い店の店員は気配りも上手で優しい。だから僕は何てところに入ってしまったのだと自分の好奇心に後悔を覚えた。

氷の入った水を渡されて女性はこう言った。

「えっと……君はドアを見つけて入ったの？」

「ドアって道にあつたヤツですか？」

「うん、ここへ入るにはあのドアが必要だからね」

ここへ入るにはってまるで何かの条件を満たさなければ入れないファンタジーのような事を言うお姉さんだ。大体何であんなところにドアが。

「ここへ来たって訳じゃあないよね。君はどちらかと言えば無理矢理ここへ誘われた感じなのかな」

「ええ、まあ……そういう感じです」

「フフ、大変だったね」

女性は微笑みながら労いなのかコーヒーを出してくれた。

彼女の方に視線を合わせると如何やらサービスとして出してくれたらしい。

コーヒーは苦手だけど出された以上は飲まなくてはと口に付けてみると大分甘くしてくれていて飲みやすかった。見れば白く濁っておりミルクを入れてくれたらしい。

「甘くない方が良かった？」

「い、いえ、むしろ有難いです。コーヒーあまり飲まなかったのです」

「良かった。君のような歳の子だと飲み慣れていないかなと思っただから結構甘くしておいて正解だった」

「ありがとうございます」

口に付けながらペコリと頭を下げると女性は再び安心した様に微笑んだ。

でも、ハツと思いついて僕は本題に切り出した。

「それで……ここは一体何処なんですか？」

「ああ、そうだね。ゆっくりしては本題にも入れないからね」

失敗を隠すかのようにボブカットの髪を掻きながら女性は店と自分の自己紹介をし出した。

「私はこの店主を務めている加古と言います。そして此処は特定のお客様しか入れない店、『時間屋』と言う所です」

「時計屋じゃなくて……時間屋ですか？」

「ええ、確かに時計は沢山ありますがこれは私の趣味です。世界各地の時計を集めることが大好きなのですが家には飾り切れないのでここに飾ったりしています」

趣味でこれだけの量になるなんてどれだけのお金を掛けているのか想像するだけで学生の僕は震え上がりそうだ。

「そして貴方はこの店へ入る条件を満たした数少ないお客様です」

「条件を満たした？」

「ええ、ここへ来るには特定の条件がございます。条件についてはあまり言えませんがお客様の場合は後悔と言った所ですね。君のようなお客様は特に多いケースです」

「後悔って、言っておきますけど僕には後悔するほどの事なんて無いですよ」

「いいえ、それでしたら君はここへは来られません。強い後悔があるからこそその時間屋です」  
何だ、この人は後悔があるから来られないとかあるからこそその店だとか勝手に決め付けてそもそもループしていたから来ただけであって、あそこを抜けられていたのならこんな所来たくも無い。

「俺がここへ来たのはループしていた道を抜け出したくて歩いていたらあのドアを見つけただけですよ」

「本当にそれで合っていますか？ループしていたと言うのは君が単純にここへ吸い込まれるようにして来ただけでは無いのですか？」

「そんな訳ありません！俺はここから早く帰りたいだけですよ！」

加古と言う女の人の言葉に過剰反応してしまい思わず大きな声を出してしまった。

さつきから挑発されている訳でもないのに心のどこかで何か彼女の言葉に過剰反応している。でも、冷静に考えてみればそうかも知れない、ループしていたのはあのドアが気になって僕がただ戻っていただけかとも思えてくる、信じ難いけどあのドアが最初から目に入っていたのは事実だ。

それがもたらした一種の錯覚現象かもしれないと僕はそう仮定する。

「混乱するのも無理ないです。だって、ここへ来るお客様は皆、最初は混乱しています。まあ、いきなり変な現象が起きて焦って、現れていたドアに入ってチンパンカンパンな事を言われても冷静でいられる人なんて私は見た事無いです」

「すいません、つい興奮してしまつて」

「いえ、慣れていきますから」

心を落ち着かせるために少しぬるくなったコーヒーを一口飲む。

そうして心が落ち着くまで加古さんは僕を見乍らじっと待っていてその間何も言わずに気を利かせてコーヒーが飲み終わると淹れ直してくれて、ケーキまで出してくれた。

でも、夕飯前にこう言うのを食べてしまうとお腹いっぱいになって食べられなくなってしまうから手が付けたくても付けられなかった。

「落ち着きましたか？」

「はい、ありがとうございます」

「では、本題に入らせていただきます。ここ、時間屋へ来たお客様はある特定の条件を満たしてきたと言うのは先ほども申し上げましたが貴方の場合は強い後悔があつての事で来たと言う事です。何か後悔とか……と言っても先ほどは無いと仰っていましたね」

「俺にはそう言うのはあつたのかどうなのかもわかりません。今まで人とは最低限の付き合いしかしてこなかったですし、後悔を作るほどの事ありません。何の面白みも無い人なので」

そう言いながら自分の過去に振り返って見ると本当に面白みも無い男だと痛感させられる。自然に自虐的な発言をしてしまい少し恥ずかしい思いをした。

「それでしたら何か思い当たる事とかは無いでしょうか？お客様が一番に思い当たる事がありましたらここへ来ることに繋がっているかも知れません」

「思い当たる事……」

いきなりそう言う事を言われても思い浮かぶことなんて一つも無い。

あるとするならばライトノベルの新作を買うお金が無くて発売日に買えなかった事や料理を失敗して肉野菜炒めが黒炭になりかけていた事とかだがこれは後悔と言える程の物は無い。

「ただ、僕はふとした事である人物の言葉が口から零れ落ちた。

「小沢さん……」

彼女の事が口から漏れだしたのは僕には分からない。でも、その理由は分かりたくも無いのでそれ以上の事は自分に追及はしない。僕は彼女の事が好きでは無い、いいや得意では無い。

「小沢さんと言うのは貴方のお友達とかでしょうか？」

「友達……なのですかね。知り合いだと思います」

彼女がこの場にいたらきつと『友達だよ！』とか言いながら怒るだろう。

「小沢さんは通っている中学の同級生でした」

「過去形にしていると言う事は転校されたとかでしょうか？」

「いいえ、昨日亡くなったみたいです。特に病気を患っている人でも無かったので死因は知りませんが……」

「すいません、何か変な事を聞いてしまって」

「大丈夫、ですよ。あんまり得意な人では無かったのですし、関わりも少ない人で友達と言う括りにも入らない人です」

一瞬自分の事に迷いが出たのは自分でも分からなかった。

確かにクラスメイトが死んでしまった知らせは良い思いなんてする訳が無いし、失礼だ。でも、知り合い程度の人物が死んだだけでここまで心が締め付けられるものなのか？

言ってしまうえば他人だ、彼女とはほとんど関わりが無くてたまに声を掛けてくれるだけでそれ以外何も関係は無い。

でも、何で？

何で彼女の名前を出した瞬間、こんなにも心が苦しくて、悲しい気持ちになるのだろう。

心の中の何かが暴れ始めている。

ひょっとしたらこの思いが、彼女に対する何かが後悔の念に繋がっているのかも知れない。

「でも、もしかしたら彼女の事で後悔している事はあるかも知れませんか」

心の中では無いだろうと否定しつつも僕はハニカミながら言う「加古さんはメモをして僕が言った事を記した。」

「成る程……お客様がここへ来た理由は大体分かりました」

「僕からも質問いいですか？」

「ええ、言える事と言えない事がありますのでそれを了承してくださいれば」

まあ、大体言えない事は察しが付くし、初歩的な質問だから答えてくれるだろう。

「時間屋って何ですか？」

「ああ、すみません。話があっち行ったり、こっち行ったりしていたので時間屋自体の説明が出来ていませんでしたね。それではまず本題へ入る前に時間屋の説明をさせていただきます」

いつの間にか無くなっていたコーヒーをまた淹れ直して加古さんは時間屋の説明をした。「時間屋というのは特定の条件を満たされたお客様に……君の場合は後悔ですね。それを

晴らしてスッキリとした想いになって頂く為に時間を遡って目的の事を達成してもらおうのが時間屋です。信じられないでしょうけど百聞は一見に如かず、なのでこれに時間を合わせてもらいます」

そう言っただけでカウンターキッチンの下の棚を開けて、出した物はもちろん時計だった。

古く少し小さい時計で形的には西洋の時計でよく見るようなシルエットの時計だ。金の装飾とか光り物は一切ないけれどこう言う素朴な感じで年代観があるのは良い。

しかしいま信じられない。

この人は、百聞は一見に如かずだからと言っていたがこの世にそんな時間が戻せる未来的なアイテムがあるなら是非貰いたいものだ。

「これに遡りたい時間を合わせてもらって、上のスイッチを押せばその時間に遡れることが出来ます。ただし注意してほしい事がいくつか、まずこの店自体の存在を明かさないと時間を遡って来た発言をしない事」

「それを破った場合どうなるのですか？」

「特に害をなすような目には遭いません。ただ言ってしまった時点で遡っていた時間は強制的に終わり、この店の事も忘れてもらうだけです」

随分と淡々に言っているが要は口外させない為に記憶を消すと言う事だ。

何時ぞやの黒スーツを着た男達と宇宙人のSF映画を思い出す。

「なので、この二つを注意していただければ大丈夫です」

「目的を達成したらどうなるの？」

「目的を達成した場合はその時点で遡っていた時間は今いる時間に戻って来るだけです。注意点を破った時と同じで口外されることは避けたいのでこの店の事を忘れていただきます。達成しても注意点を破っても最終的な事は変わりません」

どちらにせよこの店の存在を明かされるのは避けたいから今はなしている事も忘れてもらうと言う事だ。戻りたい時間か、小沢さんがここへ来た経緯に関わっているとすれば彼女に会ってみるしかない。合わせる時間はどうしよう。余裕を持った方がいいのか、それとも彼女の死の直前くらいまでにすればいいのか。

待てよ、時間が戻った場合今の時間は同様に進むと言う事なのか戻って来た時の時間も比例しているのか？

それを聞いてみるとそんな事は無いらしく遡って来た時間から戻ってくる場合、この時計が働きかけて遡って来た時間から今の時間の一時間後くらいにまで持って行ってくれるらしい。仮に一週間前へ戻っても、体感時間は一時間と言う事になる。

今は八時半だから戻ってくる頃には九時半か……親はまだ帰っていない時間だ。

「それでは戻りたい時間をセットしてください」

「これって最大何日くらいにまで戻せる？」

「一週間ですね。月や年へ戻れる程そこまで都合の良い道具では無いので」

言われてみればそうだ。

ゲームやライトノベルにもこう言う過去へ戻れるアイテムはよく目にする。でも、どのアイテムにも共通点があつてそれぞれに制約がある事だ。まあ、制約が無くてそこまで都合の良いアイテムだったら話も面白くないから作者は付けているのだろう。だけどこれは上手く使えればどの時空系と言えはいいのだろうか。そう言うジャンルの作品に出てくるアイテムを凌駕するほどの物だ。

だからこの店の存在は隠しているのだろうし、記憶だつて消させたい所だろうと僕は理解した。そこで僕は小沢さんが亡くなる直前に時間をセットするのではなく小沢さんが亡くなる四日前に戻す事にした。

こう言うのを目にすると必ず誰かは変な風に悪用してしまうだろう。僕だつてその時計が放つ魔力に魅せられて悪用してしまおうと思つてしまつたからだ。本来の目的など僕にはどうでもいい、それよりも自分の欲望を満たしたいと思つて四日前にセットした。

時計の針を左回りに四週回して後は一番上にあるボタンを押すだけらしい。

「……」

「どうしました？」

「あ、いや……何でも無いです」

今になって悪用してしまおうと言う心に迷いが芽生え始めてしまつた。もし、バレた時の事なんて考えてはいないが僕は今から後悔を晴らそうと時間を戻そうとしているのだ。自分の欲望の為に使つては良い物か。

そんな思いが芽生えて上のボタンを押すのを躊躇つていると加古さんは迷っているボクにこう言った。

「悔いのないようにしてください。ここは本当に時間を戻したいと思つているお客様だけが入れるところです。貴方は選ばれたのですよ」

強めの口調で叱るように言つた加古さんにそう説かれると僕の芽生えた思いは吹っ切れた。若干の躊躇はあつたものの加古さんに言われてからどうにでもなれと言う感じで僕はボタンを押した。

十月六日（月曜日）

目覚めるとそこは見慣れた天井。

窓越しに入って来る朝日が眩しく嫌でも目が覚めてしまう。

ベッドから起き上がって寝癖を掻きながら傍らに置いてあるスマートフォンを確認すると本当に四日前に戻っている。寝間着も覚えていないが同じだと思う。

確かこの日は母さんが休みだったはずだ。

下の寝室で寝ていると思う。あの人は、家事は出来るけど仕事の疲れであまりやらない為に弁当や朝ごはんを作るのは僕の仕事だ。休みの日は朝以外あっちがやってくれる、仕事の日は僕が家事をやる。洗濯なり、料理なり、掃除なり小学生の頃からやっていたから今ではほとんどの事は熟せるようになった。

将来主夫になろうかなと思うくらいだ。

部屋を出てリビングにあるキッチンに立ってまず顔を洗い、目を覚まして冷蔵庫の中身を見て僕はその日に作った朝食を思い出した。

「確か、トーストとスクランブルエッグとウインナーだったよな。後は買い置きのカップスープを作って……」

冷蔵庫の中はその日に作った朝食の材料がある。

でも、折角時間を戻したので違う物を作れるのではないかと思いついて冷蔵庫の中身を漁って見るとベーコンとスライスチーズが見つかった。そう言えば前にピザトーストに挑戦しようと思っていた。随分前に買って置いて何だかんだ言って挑戦出来ていなかった、だから挑戦してみようと思いついて、挑戦して見る事にした。

パンの表面にケチャップソースをまんべんなく塗り、その上に細かく切ったベーコンと輪切りにしたピーマンを乗せて粗挽きコショウを振りかけて、そのまた上にスライスチーズを乗せてオーブントースターで五分ほど焼けば完成だ。

母さんの分も作って、更にサラダと買い置きのスープを作って、昨日録画したアニメを見ながら食べているとふと僕は失敗に気づく。

弁当を作る時間が無い事に……

そうだった、日曜日の夜に米を炊くべきだったのに調子を崩して炊けなかったんだ。今から炊こうにも一時間以上掛かるから確定で学校に遅刻をしてしまう。慌てて部屋に戻って自分の財布の中身を確認する。

うちの学校では弁当注文が可能だから五百円さえあれば弁当は注文できる。

財布の中身は千円札が二枚と余裕だった。

それでも気が抜けないのは弁当注文には時間制限がある。朝の会の十分前には注文受付は終了となり昼飯は抜きになる。

言ったような気もするが僕の家は学校から近いので朝の会ギリギリに登校するからいつものように準備していたら間に合わないから自信作のピザトーストの味を堪能出来ぬまま食べ終えて、皿洗いは母さんがやってくれる事を信じて皿を水に漬けて、歯を磨いて髪を整えて制服に着替えて下に降りると寝室のドアを開けて寝ている母さんに挨拶を言った。

「母さん、学校行くね。飯は作ってあるから食って皿は洗っておいて」

タオルケットを抱き枕代わりにしながら寝ている母さんは精一杯の唸りと手を軽く上げてヒラヒラと振って『いつてらっしゃい』と言われなかったがそれでも反応を示してくれただけで儲けものだ。

家の鍵をズボンのポケットに入れてスニーカーを履いて玄関を勢いよく開けて僕は小走りで学校に向かった。全速力で走れば数十秒で着くけどそこまで時間が無いと言う訳でもないし疲れるのは嫌いだから僕は早歩き以上の小走りでマラソンをするように走って余裕を持って学校に着いて上履きに履き替える。理科室前の弁当注文場所へ来ると中々の人だかりだ。弁当に飽きた人もいれば、弁当が無いと言う人もいる。

一枚のメモ用紙を取って弁当の名前とクラスと番号、自分の名前を書いて受付のおばちゃんに渡し会計を済ませた。

お釣りをもらって財布の中にしまいながら教室の方へ向かっている途中、階段を上っている途中、僕を抜いて行く人を見ると彼女がいた。

小沢茉莉、彼女は不意に追い抜きざまに挨拶を言った。

「おはよう」

ニコニコしながら彼女は階段を上って行ってしまった。

「……コレは知らないぞ」

この日はいつものように朝の会ギリギリに登校していたからこんな展開は知らない。

教室に入って席に着くと隣の席の山田は今日も早弁をしながら週刊漫画雑誌を読んでいる。こういう展開も僕は知らない。

と言うかこいつ週刊誌を学校に持ってきているがバレたらどうなるのか分かっているのか。それとも分かっているって持ってきているのか。ともかく今週は読めなかったから読んでみたい。

「それ読み終わったら貸してくれないか？」

「ん、良いけどお前これ読むのかよ？小説ばかり読むやつって漫画雑誌は好かないかと思っていたけど案外読むんだな」

「読むに決まっているだろう。俺は本であればとりあえず読むよ、漫画だって結構読んでい  
る」

「へくじゃあ俺が読み終わったら貸してあげるよ。昼休み位でいいよね？」

「ああ、いいよ」

分かったと言って再び箸を動かしながら週刊誌を読み始めた。

隣の席にいる山田とは割とアニメの話などで盛り上がった。遊ぶほども無いがアニメイベントなどではあったり会ったりすることがしばしばあり会って行くたびにいつの間にか同じクラスになって話すようになった。

小沢さんは一方的に話して終わるけど、こいつとは対等な話が出るからその時だけは心が落ち着く。こいつと喋るようになってから少し人と話す楽しさが分かった気がした。

約束を交わすとクラス担任が教室に入って来た。

「おら〜席に着け〜」

緩い声を上げながらクラス名簿の手帳をもてあそんでいる。

そう言われても緩い感じがするためクラスメイト達は先生に言われて席に着くまでに五分ほど掛かって席に着く。

クラス委員長が起立、礼と言って席に座ると担任は癖である額をポリポリと掻きながら出席を取っている。

「よし、今日も全員いるね。まあ、ウチのクラスはちよくちよくサボりはいるものの病欠とかは無いから良い事だよね〜」

先生の緩い話なんてみんな聞く気もせず、各々勝手な事を続けている。

小沢さんが亡くなった時は真剣に聞いていたのに本当に勝手な奴らだと思った。

「特に来嶋なくお前家が近いのに仮病とか使ってよく休むし。アレ、バレバレだよ」

「マジですか？」

「マジだよ。お前、ポーカーフェイスの割には嘘下手だよね〜」

この人に言われると何だか腹が立つ。

緩さも相まってか笑いながら言わるとなおさらだ。

朝の会が終わると一時限目の始まりだ。

一時限目は社会、今習っているのは日本史の江戸時代だ。

「歴史か……来嶋、ノート取ってある？」

「あるけど、どうして。取ってないの？」

「うん、さっきの貸す代わりとしてノート貸してくれないか？後で」

「まあ、いいよ。字が汚いのを我慢してくれれば」

「大丈夫だ。俺も汚いから！」

ビシッと親指を立てられても全然恰好良くないです。

まあ、僕も言えたものではないがノートを書くときの字は相当汚い。申請の紙とか高校志望動機の紙とかは綺麗な字で書けるが普段は手を抜いて汚い字、殴り書きだ。

だからノート提出の採点は最悪で酷い時は出したはずなのにC判定で帰ってきたほどだ。最近は少し意識をして書くようになってはなっている。

一時限目の先生が教室に入って来ると授業は始まる。

一度聞いた内容なのでつまらない授業だった。ノートを取るのも二度目だからうんざりする。

すると視線を感じてその視線を追うように見ると小沢さんがいつも浮かべている嘘の笑顔をしておらず真剣な表情でこちらを見ている。普段からあまり真剣な表情を見せないから何だか怖くなって僕は視線を逸らすが見ても見ている。

僕を見ていると言うよりも品定めをしているような視線だ。

その視線が何だかチクチクと来るから少しでも避けようとうまくまると。

「おら、來嶋！眠いのなら座ってないで立って授業をして貰おうか」

「え……？」

「え、じゃねえよ！ホレ、早く立て」

クラスメイトがクスクスと笑い、先生も珍しいなと言いながら笑っている。僕はただ彼女の視線を避けようとうまくまっただけなのに寝ていると判断されると何たる理不尽か。

結局、僕は立ったまま授業を受けることになりクラスの晒し者とされて授業は終わった。

「やっと終わった……よ」  
疲れた。

その一言に尽きる。一つ一つの行動が異なるだけでこんなにも起こる出来事が違うなんて思いもしなかった。そのくせ、授業はつまらないと来た。

一度聞いた授業はつまらない映画を二度見ているような気がして本当に腹だたい一日だった。これなら逆に後悔が募ってしまう。そして何より帰り際に担任の図書室整理を頼まれて帰り時間が少し遅くなった事も嫌だった。

明日からは変わらない同じ一日をせめて過ごしたい。  
それだけが願いだっただけ。

でも、何とか今日は一日を乗り切ったから本当の目的を果たせる時が来た。学校から家へ帰ると母親は何処かに出かけているらしく家にはいなかった。朝食の皿も洗ってあり心の中で安心しつつ弁当を洗って、制服から私服に着替えて再び外へ出る。

自転車で行くこと四十分ほど少し都会になっている街まで出ると僕が田舎者のような気がしてならない。ここは制服で来るとよくカツアゲに会うと聞くから私服に着替えて街の方まで出てきたのだ。そこまでする理由は僕の欲望を果たすためだ。電化製品店に入りそこに併設されている本屋まで行くと目的の品はあった。

発売日に近くの本屋をハシゴしても買えなかった大人気ライトノベルだ。

これを買うために遠い街まで来て、時間を戻したのだ。発売日に買えなかった為に次の日に買いに行こうとしたが連休の母親の買い物に付き合わされたり、ゲームのイベントだったりと何だかんだ言って買えなかったのだ。だから今日が買える日だと踏んで、わざわざ疲れている身体に鞭を打って買いに来た。

買い終えてゲームコーナーや高画質テレビの視聴までしていたら時刻は六時半になっており辺りは暗くなってきたりしている時間になっていた。

親からの帰宅要請の連絡は無いがそろそろ帰らないと思って駐輪場に停めていた自転車を走らせる事にした。

栄えている方だけに車が通る道だから信号も必然的に車を優先させてしまう。歩行者が渡っていい時間になっても一、二分程度で終了してしまうからそこは不満を覚えてしまう。

待つ事五分経ってやっと信号が変わってくれて横断歩道を渡って、裏道の方へ入って行く。ここなら早出し、信号なども無いからスムーズに進める。

早く帰ってライトノベルが読みたい。

その一心でペダルを踏んでいるとその時だった。

街灯の少ない所の僕が進んでいる道の方で走っている女性がいた。それが知らない女性なら無視して家路へ急ぐがそれがクラスメイトで後悔の原因とされている小沢さんなら話は別だ。

街灯が少なく、暗くて見えにくいが何かから逃げるように走っている。

息を切らしながら、足がもつれながらも正に必死に逃げている。いつもニコニコと笑っていて偽善者の彼女はあんな顔を歪めている表情を見る事になるなんて思いもしなかった。見たかったわけでは無いけど何だか興味が湧いてしまう。彼女が何かから逃げているのだろう。ストーカーか通り魔なのだろうか、それで強姦されるとしたら流石に止めに入るがそうじゃ無かったら心の中で笑いつつトンズらしよう、

僕はそこまで勇気がある人間ではないし、心の穢れた人間だからどうしても人が苦しんでいる所が見たくなってしまう。喧嘩だって僕は表情には出さないけど心の中では爆笑している。そんな最低クズ人間は苦手な人の苦しんでいる所を見たいために彼女を追う事にした。その時だけは彼女を追う事しか考えていなくて発売日に買ったライトノベルの存在なんて忘れていた。

彼女を追う事にして逃げている背中を追うと何かから逃げているのだろう。僕の後ろにも彼女の後ろにも誰もいない。全速力でマラソンしている訳でもないし、傍から見ても誰から見ても彼女は逃げているのか益々気になってしまった。

小沢さんは何に逃げているのか益々気になってしまった。しばらく追っていると流石に疲れてこないのかと気になり始めて来たころ、突然僕の前から突風が吹いてあまりに強い風が吹くから目を閉じて一瞬自転車をこぐ足が止まってしまった。

突風が止むと目を開けてみると彼女はおらず、少し動きが止まっているだけで見失ってしまった。しかし諦める事よりも好奇心が勝っている為、僕は見失った彼女を探す事にした。考えられるのはまっすぐ走っているならまだ見えていると思う。僕が突風を受けた瞬間に高架線方面の道である右手に曲がったかもしくは警察署の方面の左手に曲がったのかという時嫌でも人目を避けたいと思う。恥ずかしい事をするのが大嫌いな彼女だ。人目がある警察署方面は避けていて欲しいと願いながら僕は高架線方面の右に曲がった。

高架線方面も若干人目につくがこの時間帯なら通る人はあまりいないだろう。だってあそこには幽霊が出ると言う噂があるのだから。

何年か前に高架線下の所で殺人事件が起きたらしくそれ以来女性の霊が出るようになったと言われる。出る時間帯は夕刻の五時から夜の八時くらいまで出ると言われている。

だからそれもあってその時間帯はほとんど人通りが無い。

わざわざ人目を避けるためにあんな道を通るなんて余程逃げたいのだろう。

苦手な人物があそこまで弱い姿を晒して走り回っているなんてこれをどう使って反撃してやろうかとさつきから底辺の人物が考えるような事しか考えていない下衆の僕はさつき

から口角が上がり気味の顔で彼女を追う。

高架線の近くまで来るとそろそろ彼女の姿が見えてくる頃だ。

「来ないで！」

聞きなれた声だが初めて聞く声だ。

いつもは意気揚々とした天真爛漫の子の声とは全く別物で一瞬誰かの叫び声だと思つた程だった。彼女の声だと理解するまでに数分かかつて脳が彼女の声だと判断すると僕は噂の高架線下の所まで進んだ。

高架線の下まで来ると人はここを避けて通り、ここだけ何て言うのだろう幽世の世界とでもいうべきなのか。ともかく高架線の所だけ禍々しいオーラが放たれていて近くまで来ると少し気分が悪くなった。

でも、近くまで来たのだ。

彼女がいるかどうかだけ見て、後は帰ろうと思つて高架線の柱の陰に身を隠して探偵の様に覗き込んでみると僕は目を疑つた。

彼女が逃げていたのはストーカーでも通り魔でも無い。もつと言えば人間でさえも無かつた。見れば誰だつてソレを人間だと判断できる人はいないだろう。

小沢さんはソレを見て腰を抜かし高架線の壁を背に抜けてその姿を至近距離で見えしまっている。ソレを例えるなら幽霊かそれとも怨念が生んだ姿なのか正に幽世の住人とも言ふべきなのか、ソレは地面に足が付いておらず赤い血染めのようなコートを羽織つて黒く長い髪、顔は長い髪に覆われていて見えない。映画でよく見るようなシルエットをしているが徹底的な違いがある。ホラー映画では幽霊か殺人鬼などのカテゴリーで区別されるがソレの姿は幽霊とも言えるし、殺人鬼とも言える姿だ。手に握られているのは鈍か何かだろうかともかく大きな刃物を持っている。

もしかして僕はとんでもない現場に来てしまったのではないか。

そう思つてこの場から退散しようとした時だった。クラスメイトである彼女を見捨ててもいいのだろうか。ここまでクズで下衆な考えしか出来なかつた僕だが今になって罪悪感が残るだけで僕が助けずに見捨てた彼女の死期だけが三日早まったくらいで何の事でもないし他人事だからいいけどここで逃げて意気地なしと言う自分を認めたくないから僕は彼女に声を掛けた。

「小沢さん？」

「え、來嶋君……」

白々しい感じもするが僕は幽霊の存在に触れずにぼったり会つた感じにする。これですんなり流れて退散してくればいいのだが……そうもいかないらしい。

「あれ、どうしたの？こんな所で……会うなんて珍しいね」

「こつちに來ちゃダメ！」

「へっ？」

彼女の警告を受けた瞬間、幽霊はいつの間にか僕の前まで距離を詰めてキスでもしてし

まいそんな距離で僕の事をジッと見つめて首を掴まれた。

「あがつ！」

身体を思い切り柱に叩き付けられて首を絞められている。

背中痛みで息も漏れてしまったし、更に気管を塞がれて息もともに吸えない。

手はやはり死人だ。ヒンヤリと冷たく生きていると言う温もりが全く感じられない。僕は無様にも爪を立てて引き剥がそうと試みるが力が強すぎて引き剥がせない。

こいつの腕はガリガリに痩せていてへし折ろうと思えばへし折れる程の腕なのにその腕からは考えられない程の力だ。

息が吸えなくなつて何秒経つたのだろう、視界が狭くなつてきている。彼女の顔だけが写つており小沢さんが叫んでいるけど遠いように感じる。抵抗する力も薄れて来て、ダラリと脱力し始めると幽霊は僕の耳元まで口を近づけて耳元でこう囁いた。

「ねえ、君もあの子のお友達なの？私ね、あの子と素敵な遊びをしているの、仲間に入りたいの？」

強い力で首を絞めて殺しにかかっているのに何でそんな子供のような声で楽しそうに話しかけてくるのだ。幽霊つて案外サイコパス気質の人が多いのかも知れないと思った。

「その人は関係ない！関係ない人を巻き込まないで！」

「あら、そう言っているけどそれでも無さそうよ。さっきだつてお嬢さんの事をストーリーカーしていたみたいだし。きつと私達の御遊びに入りたいのよ、人数が増えた方が遊びは楽しくなる物よ」

意識が朦朧としてきた時、幽霊は不意に手の力を抜いて僕を落とすと地面に思い切り尻を打つて痛がるよりも息を吸う事が最優先事項と本能的に判断していて彼女たちが話している内容よりも酸素を吸う事に必死だった。

怪力の手から解放されて一秒でも酸素を取り入れようと吸うが咳き込んでしまう。

小沢さんの方を見ると特に傷つけられたわけでもなく、特に変な外傷はない。

どうしてあの幽霊何かと関わっているのか次に思い浮かんだ。

「ねえ、坊や。私と一緒に遊びましょう！」

「え、どういう事？」

「どういう事もこういう事よ。この私と遊ぶの、あのお嬢さんと同じ遊びをね」

「ダメ、來嶋君。その人の言う事に従わないで……」

彼女は怯えている。こんな姿を見せられるのも初めてだが何というかこれは見たことがあるような気がする。

「お嬢ちゃんにお遊びの参加を決める権利なんて無いよ。全部決めるのは私」

よく喋る幽霊だ。

僕が知っている幽霊と言えば喋らずに只々恐怖を与えてくる存在なのに彼女は何か猟奇殺人犯と幽霊の中間のような存在だ。さっきも言ったような気はするがあの幽霊はどこか中途半端な存在だった。

「ねえ、やってくれる？」

「嫌だよ」

僕は素直に直球でそう言うとな彼女の顔から笑顔と言う化粧が落ちて行き再び首を掴んだ。  
「ねえ、これはお願いじゃないの。命令だよ、あんまり我が儘言うとな殺しちゃうぞ」

「……嫌に、決まって、いるだろ」

手の力は若干緩んでいたからまだまともな会話は出来た。

だが、彼女はどうしても僕をお遊びの仲間に入れたいらしく暴力による強硬策では無く、今度は脅迫に移った。少し彼女は息を吸って僕の耳元である事を呟く。

それは心の奥底に潜む僕を最も揺さぶる物であり同時に心の中の何かが大きく拒否反応を示した。そして僕はそのフレーズを言われると拒否反応を示しても彼女は笑いながら『断つたら言っちゃうよ』と言って脅迫をする。

胸の辺りが何かに貫かれたようでとても痛かった。

「ねえ、遊んでくれるよね？」

「分かったよ、お前のお遊びに付き合うよ」

小さな抵抗虚しく結局僕は呆気なく彼女の言う事に従う事となった。

すると僕の左腕を掴んで上着をめくり、彼女は二の腕辺りをスツと円を書くようになぞると何やら変な太陽の刻印が浮かび上がって来た。これは一体何だ。

小沢さんはあの幽霊に何かやられたのかさっきまでの抵抗が嘘のように静まっていた。と言うか気絶している。

二の腕の刻印の中心には漢数字で参と書かれている。

「コレは逃げられないようにする枷であり私と遊んでいると言うマーカーでもあり、同時にいずれは死を迎えると言う呪いの印でもあるの」

「え、死ぬの？」

「貴方、リアクション薄いわね。死ぬと言うのは少し盛りすぎたけどルールを破つたら少し痛い目にあってもらうだけ、大丈夫。ほんの一瞬だけ天国へ行くだけだから抜け出すのは自分自身だけ……」

それを死ぬと言うんじゃないかと言いたい。

でも、さっきのように彼女の機嫌を損ねたら殺されかねないから言うのは止めた。しかもほのぼのとした空気が流れているけど僕と小沢さんが聞きと言う事には変わらないのだ。

この幽霊の機嫌を損ねる訳にはいかない。

「ルールは単純刻印の中に刻まれている日数を逃げきれたらあなた達の勝ち、どちらかが私に捕まった時点であなた達の負け。負けたら殺すから死ぬ気で逃げてよ」

「殺すって俺達が勝つたらどうなるのさ？」

「貴方達が勝つたら何も起こらないわよ。ただ友情が深まるだけじゃないの？」

つまり僕たちはこの女の遊びに付き合わされてあわよくば友達を欲しいと言う魂胆なのだろう。ふざけているように言っているが本当に死ぬ気で逃げなくてはいけないと言う事

だ。

「分かったよ。他にルールは？」

「うーん、その刻印だけど隠れていても無駄だからね。刻印をこすれば簡単にあぶり出せるから隠れすぎも注意だよ」

「ぬあっ！」

幽霊はクイツとドアノブを捻るように捻った瞬間刻印はポウツと灯すように光り、同時に焼けるような痛さが全身に伝わった。最初は激しいやけどを負ったような痛みが二の腕から始まり、そこから全身に広がり火炙りにあったような熱さが全身に回って僕は叫びながら地面をのたうち回った。

「じゃあ、これから三日間頑張つて〜」

何て自分勝手なゲームに巻き込まれてしまったんだ。

本を買いに来ただけで早くも自分の身に不幸が降りかかるなんて人生と言うのは本当に分からないと痛感した時だった。

小沢さんが目を覚まして早速ゲームが始まっていた事に気づいた僕は逃げようと自転車に乗ったが彼女も同じ目にあっていると言う事から色々話合った結果一緒に逃げる事になった。

時刻は午後七時を回っている為、まずは腹ごしらえをしようと思つて近くのハンバーガーショップに行く事にした。僕は普通のハンバーガーセットにしたけれど小沢さんは凶々しくも照り焼きチキンバーガーセットにサラダを追加して会計を一緒にさせて僕に支払う事になった。何でも彼女はお金が無いらしくお腹を空いている為僕におごらせたと云うのか何て性悪な女だ。

「男の子に奢ってもらつたの初めてだよ」

「そうですね、良かったですね」

「でも、何で私照り焼きチキンバーガーセットにしたのかしら？」

「知らねえよお前が勝手に注文追加して来ただけだろ！」

「ああ、そうだ。無性に食べたくなったからだ」

「全然、聞いていないだろ？」

「ええ、何が？」

この女、今が一時的な協力でなければこの場で張り倒している所だ。

次からは絶対に奢らないようにしよう。特に奢ってもらつて文句を言う様な奴、小沢さんタイプを見極めるようにしよう。

人の話を聞かないで『いただきます』を言わずにハンバーガーを食っている奴に一ミリも危機感が感じられない。さっきまでの緊迫感は何処へ行ったのやら。

「で、小沢さんは何であんな幽霊に追いかけて回されている訳？」

「ん、特にこれと言つた経緯は無いよ。君が私を追いかけて回してきたようにただあそこの、高架線の心霊スポットに興味を持って行ってみたらこうなっていたの。昔から心霊スポットとか都市伝説を追うのが好きだったから」

成る程、彼女は本物の馬鹿だと言う事が分かった。

偽善者で、馬鹿で、正直者となつてくるといよいよ救いようのない人物だ。興味を持ったからつて自分の身を縛るような事をして何が楽しいのか……

「そう言えば何で私を追いかけてきたの？」

「それこそこれと言つた経緯は無いよ。本の新作を買つたら見たことのない表情を見せた人がいたから面白そうだから追いかけてみただけだよ」

「君って意外と性格悪いんだね。知らなかったよ」

「知ってどうする。知った所であまり信じないと思うぞ、俺って意外と学校では静かだからね」

「ドラマとか小説とかでよくいるキャラクターだ。キモいなくそれ」

「一言余計だ」

いちいち人の腹を立たせるような発言をする女だ。

本当に張り倒してやりたい。結局、照り焼きソースが気に入らないからと言って彼女はおごってもらったにも関わらず完食せずに終わってしまった。

○十月九日（木曜日）

翌日の事は本当に何も無かったから書き残すほどでも無い事だったので止めた。

だって幽霊自体が一昨日から何も襲って来ないのだ。これに僕たちも流石に飽きてきたために学校では極力、共に行動せずに刻印が疼き出したら集まると言う感じにしている。刻印の漢数字は既に壱となっており今日さえ乗り切れれば終わりだ。

そして僕は気づき始めていた。

僕は彼女の、小沢さんの事が好きだと言う事に。

確かに忌み嫌っている事だがここ数日彼女がとてもきれいに覚えて来ている。あの女の幽霊に耳打ちされた事と同じだ。

僕が後悔していた事……それは小沢さんに話す事も出来ずに彼女に想いも告げずに先立たれてしまった事だ。

そして勇気のなかった僕に勇気をくれた人物で感謝を言えていない。

だからこうして今、彼女を助けようとしたいのだ。

三日目の夜、僕たちはいつものように人通りの多い街で時間を潰していたら突然刻印が焼けるようにうずき始めて、痛みには耐えきれず僕と小沢さんは逸れてしまったのだ。

きつとあの幽霊が本気を出してきて今日殺しに来ている狼煙のような物だろう。

痛みを我慢しながら僕は約束していた事を思い出す。約束していたのはもし刻印が焼けるようになって逸れてしまったら高架線下にいったん集合しようと言束して今まさにそこへ向かうべきだと思つて僕は高架線下の方へ走つた。

高架線の方まで来ると彼女の姿は会ったが同時に血染めの赤いコートを羽織つた女性が不気味な笑みを浮かべて小沢さんの首を絞めている。

こちらに気づきその笑みはどんどん不気味さを増していき腕の力も強くなっている事が分かった。

僕は幽霊に敵わないまでも地面を思い切り蹴つて走り出した。

彼女をあの腕から離させようとした時、持っていた鈍のような物で僕が彼女たちに着く前にあの幽霊は小沢さんに向けて鈍を振り下ろした。

血が飛び散るだろうと僕は反射的に防御姿勢を取って返り血の生暖かさが無いから恐る恐る目を開けてみると鈍は小沢さんの身体を断ち切っている訳でもなくすり抜けていたのだ。

「え、どうして……」

「最初から殺すつもりなんて無かったわよ。これは御遊びだつて言ったでしょう」

「じゃあ、この刻印は？」

「確かに呪いの一種ではあるけどあなた達が擦ればすぐ消える代物よ」  
そう言われて擦って見ると確かにすぐに消えた。

これがお遊びだなんて悪趣味にも程がある。

あの幽霊は生前殺された高架線下を渡る人限定で姿を現し、成仏するまで片っ端から声を掛けては暇を潰して、たまに人間をからかっているだけだったらしい。あの鈍もいわゆるジョーク的なもので、首を絞めたのはリアルさを引き出すための演出だったらしいが一度間違えば確実に死んでいたため、それについて彼女は地面に頭をこすりつけて謝っていた。

「ごめんなさい」

「ああ、いいよ。元から殺す気でも無さそうだったし」

「う、うん。そうだよ……」

少し引き気味の小沢さんは本当に殺されそうになってビビったのか少し涙目だった。

そして今日が成仏する日らしくポワァッと幽霊の身体が光を帯び始めて消えて行く間隙彼女は僕の耳元で『頑張ってね』とだけ言って眩しい笑顔をしながら消えて行った。

「消えちゃったね」

「ああ」

「結局何だったんだろうね」

「ああ」

「何だか虚しさしか残らないや」

「ああ」

その返事しか出来なくて僕は急に彼女を女性として意識してしまう様になったからまともにも見れない。今日が終わってしまったえば彼女はきつと死んでしまうのだろう。それだけは嫌だから僕はこう言った。

「小沢さん……」

「ん、何？」

「土曜日、空いている？」

「空いているよ。何、デートでもしたいの？」

「嫌か？」

「ううん、全然構わないよ。と言うか行こうよ、デート」

これが聞いて良かった。

今は告白する勇気は無くてもこれが聞けただけでも嬉しい。

結局、僕は最低人間のままだった。

そして今日は終わり金曜日がやって来て僕は現在へと戻って行った。

「いかがでしたか？」

「後悔は晴らせましたよ」

「そうですか」

加古さんはニコリとだけ笑ってくれてとても嬉しそうにまるで自分のように笑って  
くれていた。

「では、御退店と言う事で大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

席を立ちあがってドアの前まで来ると僕はここが何だか惜しくなってしまう。

「また、ここへ来られますかね？」

加古さんは静かに首を横に振った。

「いいえ、ここは特定の条件を満たされたお客様が入れるお店です。二度目の条件を満たす  
人などそうそうおりません」

「そうですか……ありがとうございます」

僕は彼女の顔を見まいと二度と振り返らずドアノブを回して出て行く直前こう言われた。

「またのお越しをお待ちしております」

十月十一日（土曜日）

晴れやかなこの日に僕は朝早くから家を出て高架線の下の方へ向かう。

何故だか分からないけど本能でそこへ行けと言われていて気がして僕は大急ぎで支度を済まして自転車で高架線の下の方へ行く。

一体、何があるのだかと思いつながら向うと高架線の下で待つ人が一人立っていた。

その人は僕の良く知っているひとで僕が恋い焦がれていた存在。

彼女は僕を見つけてこう言う。

「おはよう！」

彼女にそう言われて僕は涙を一粒流しながらこういう。

「おはよう……」

僕は一体どうして泣いているのだろう……今はそれが知りたかった。